

要求しているかもしない。

終り

夢中だつた現役時代

林毅

入学して一週間程立ち、中学時代少し借りた野球をやろうかなと考えて、矢先が「中学時代の先輩で『秀才』であった方がハンドボール部におられたので、えらい人があやつたはうのやから、ええクラブやうと思つて、入つてしまつた。体力的には自信があつたし、未知のスポーツに対する興味から張り切つていたのだが、うわさにたたかわす練習は激しく、毎日くそ罵我夢中で過していった。しかし、日が増すにつれて何に対しても自信がなくなつてきて、それによ加え、生来の気の弱さも手伝つて全く不思議である。特に今でも鮮明に思いだされるのは、六月頃へ一年の時、雨で練習が休みにならうとしている時、先輩、津田、榎本兩氏が来られ、柔道場で腕立ふせ五十五回余を含めた基礎練習をやって後、土砂降りの雨の中を全員ミちゃんとなんで運動場を十程走つて、体のシンまで冷えきつてしまい、ぶろく震えながら家へ帰つた。

と、夏季強化合宿のあの“元氣とみた”宣
言に初まる猛練習、倒れた友人をあとにし
て部屋から運動場へいく時に胸にわく一種
独特の感情、僕自身、ぶつたおれたり、 目
の前がまくらになり先生のいる高台の木
陰で頭に水をかけられたりした。全くすこ
い練習であつた、だが上級生の良きリード
のもとに、何とかがんばつてついていくた
おかげで、フオワードの一員として二度の
優勝経験がでた。初優勝した当時、本當
決勝戦が思ひだされ眠れなかつた。二年
になり三年が引退して、それまで選手でた
ていた三人を除いて新しい陣容になつた。
戎野、西条等が抜けたら高津もこれであ
かんやろ」と他校のものにいやれたのにはあ
くソラとフアイトを燃した。同じ学年には、
名キーパー増田君、攻守に活躍してくれた
田中君、小さいながらバツクで奮闘、マネ
ジヤーをやってくれた渡辺君、眼鏡をか
けたクラブの秀才森君、可しゃれて足の
走い植村君、井口君や齊藤君、それに土田君などがあ
た・練習に励んだ。主将で無理なことをモリ
が皆然つてついてくれた。あるいは、
が

たかった。結果的にみると、新人大会は一
点差で二位、府民体育祭三位で近畿大会に一
出場した程度に止まつた。決して満足のゆ
く成績ではなかつたが、一生懸命だったこととゆ
は確しかである。今でもハンドボールを続
けておれることは、高校時代での苦しか
れた練習のシル・タ・カ・ゲであり、今から考
えたいと共にあります。今から考
えようと先に
ある。

全日本室内大会を見て

上田 孝

今、テレビで全日本室内ハンドボールを見
てきた。テレビに写った最初は愛知紡績を
対日本体育大学の試合、9対6 豊橋が勝つ。
おめでたい。何故かといふと大学現役を
役より実業団が勝つから。これは女子の
大崎電機工業が優勝戦であった。次の男子の決勝は、
大崎電機工業対東京芝浦工大、テレビで見
たのは12対10で大崎がリード。後残り時間見
て惜しきれど、これが芝浦の大崎の勝つだろ
う。これは有難い。我高津ラブは芝浦大と
争ひを憶えていた。それ以来私は芝浦大を敗れ
て憎んでいた。数年前に試合をして36対0で敗れ
たのを憶えていた。それ以来私は芝浦大を敗れ
て憎んでいた。それでも今日の試合を見て
とてもフェアで神的である。

も、私は実業団の大崎電機を応援した。
自身につながるからである。芝浦大が
されたのはハンドボールを普及させるため
手段であるかもしれない。でもスポーツに
関する限り、私としてはその様なことを考
えたくない。大崎電機工業は実力で優勝し
たのである。実際に立派である。私自身事業
に成功してこの様な優秀な地位を持ったい
と常々思っている。我々高津ラブがか
て足許にも及ばない。芝浦が実業団に敗
れたのだ。私も必ず成功して優秀なチーム
を養える様に奉仕する。諸君に頼む。実績
に万いで援助の面に於て応援してくれる
に必ずハンドボール界において一派を
内ハンドボール大会で、愛知紡績と大崎
電機に優勝の栄冠が上った様に私の事業
スポーツ面で大きな誇りを持ちたい。
ケチな根性じやなく堂々とやつてもら
た。私が必ず後押しする。
現実に会社には、入つて勝つて働いて
親のスネかじりの大学生に勝つて
こそ大きい意義がある。

一一
九
六
一
一
八
五

終